

して第四章に於ては、漢代我國へ贈つたと稱せられてゐる有名な「倭奴國王」の金印なるものは實に僞作であると論斷を下された。

「倭奴國又は「倭奴國」といふのは實は記錄の誤なのであつて、元來倭奴國(邦語津の國)からといふ名で日本の舟人が彼土に航海したのであり彼土の人も亦我國を「倭國」とさへ記したのである然るにその倭字が唐代の學者によつて倭字に書きかへられて倭奴國といふやうな誤つた名が出来た。これ實に唐以後の學者のいたづらであつて、斷じて我國の古代に「倭奴」といふ地名はなかつた。従つて金印は僞作に外ならぬと論斷せられたものであり、注目すべき主張であらう。

更に第八章は東亞海路の發展と題し、先づ大陸との航路として北九州から朝鮮半島の西方を廻つて山東へ向ふ北路と、平戸、五島を経て揚子江口方面へ直航する南路とを併せ記し、次いで南九州から沖繩方面へ通ずる西海路の發展に言及されてゐる。これに續く第九章では遣唐使の航路と海外知識を論じ、第十章では宋代の交通に筆を進められた。

第十一章はいささか趣を變へ、我國最古の船法度として貞應年間のものとな正年間のものとな掲載し、最後の第十二章では、前半で右の船法度を解説せられた。その後半では轉じて輸出入品の考察に移り、我國古代より既に海外から物資の輸入があり、特に南方からは玉や香料の多くを輸入した事實を明かにして、平安時代に唐物と稱せられた海外輸入品が北支産のものは少く、殆ど南洋もしくは南支那の物産なることに注意を喚起し、轉じて日本か

らの海外輸出品中それら南方の物産が仲繼せられてゐることを指摘して、日本と南方との古くからの交通狀況を描寫せられた。なほ最終の附篇は、素戔鳴尊の御神徳を中心として古代の日鮮關係を説述せられた祇園社における著者の講演録である。

蓋し、博學なる著者により豊富に内容を盛上げられた全卷を擧げて、上代海外交通に關するあらゆる問題を網羅した感あり、幾多の創見を披瀝して上代交通史の脈卷たるの概がある。論斷に際しては文獻の博搜はもとよりのこととして、嘗て「尺度綜考」に示された古代尺度に對する造詣の深さが隨所に有力な武器を與へて居る様に思はれる。

筆者もとより無學不文、この著書を紹介するには些かその人を得ぬうらみが深いのであるが、本書前半の諸章は、數年前筆者の未だ京大史學科に在學中、特殊講義として親しく拜聴したものであり思出も深いまゝ、敢てこゝに拙文を弄して、その公刊を廣く江湖に告げ知らせんとする微意に出でたものに外ならない。大先輩でもありまた恩師とも仰ぐ著者の御健闘を祝福する次第である。(昭和十八年九月・刀江書院刊・四五頁・賣價五圓八拾八錢(三上正利)

日本を中
心とせる 軌近地理學發達史 山口 貞雄 著

日本地理學史は既に三高の藤田元春先生に依つて堅實なる礎石が打築かれ、又多くの俊才の手で我が地理學の先蹤の功績が精細にせられてゐる。けれども明治以來の日本地理學界の躍動に就い

では未だ充分に検討されては居なかつた。初學者が地理學の動向を見定めんとする時、自己を繞る現狀と地理學史を續いて知る過去との間に、明治大正の二代が大きな不連續の間隙をなして横たはつてゐる事を知り困惑するのである。その缺を補ふものとして、此の「日本を中心とする輓近地理學發達史」の上梓は實に意義深いものと言ふべきである。

著者山口貞雄氏の地理學界に於ける歩みはその自序の中及び奥付中の略歴に明かであるが、それよりも本書を通じて感得せられる著者の誠實そのものの學究態度こそ深く敬意を表し、此の様な仕事に對して誠に適役を得たといふ事を喜ばねばならない。昨年度「地理學」誌上に再度に互つて掲載せられた氏の小論は本書執筆の過程であつたのであらう。

本書は、序説、近世地理學の發達と其の崩壞、現代地理學の建設、結語の四つの章から成つてゐる。序説には日本地理學が國體に基いて「生きもの」の如く生々發展するものであり、しかもそれでゐてそこに一貫せる國土への「親愛感」が流れてゐる事が説かれてゐる。而して支那及び泰西の異質的學統が攝收されても、雖て此の太初以來一貫せる樞軸の下に醇化せられ、各々その所を得しめられて發展して行く所に、日本地理學の傳統が潜んでゐる事も明かにせられてゐる。此の著者の把握は本論の到る所に表れて發達史に一貫性を持たせる役割を果してゐる。本論の内、近世地理學は徳川時代と明治大正時代とに區分せられてゐるが、前者を簡明に、後者を詳細に記述せられたのは本書の性質として當然で

ある。實際に本書の面白さは明治大正時代以後、殊にその末期近代地理學の成熟時代あたり以後にある。そして混迷せる地理學が地誌へ逃避的歸結をなし、その中から現代地理學建設の植音が湧き起つて來る經過は、著者の周到な引例に伴奏されて、本書の極頂をなすものであらう。終結は現代の新日本地理學の行くべき道を力強く説いた結語を以て飾られてゐる。

本書の興味は以上に盡きるものではない。日本地理學の中には支那及び泰西の地理學が醇化されて居る事に従つて、日本地理學の發達史を述べると共に、世界地理學史が同時に織り込まれてゐる事は興味ある試みと言はねばなるまい。

最後に紹介の範圍を越えて批判めいた私言を書く事を許して頂けるなら、著者の解釋の基礎たる觀念に異趣同舟の傾向はないであらうかと言ふこと、日本地理思想の根柢は「親愛感」なる言葉以上につきつめらるべきではないかといふことである。しかし此のやうな事がよし眞實であつても、それは毫も本書の價値を傷つけるものではない。本書は確かに現代地理學建設に對して貢獻するものなる事を信じる。(昭和十八年八月、濟美堂發行・A5版、賣價貳圓八拾七錢)(村上次男)

彙

報